

なかよくとまつて  
うごかしたけれど  
うごかない

おばさん

お早う

かあ かあ かあ

— 山村暮鳥氏 —

これは七五調でもなければ五七調でもない、何調と言つて名はつけられないほどの複雑なリズムが交錯してゐると思ひますが、それでゐて如何にもわざとらしからぬ、内容に相應しいリズムの統一があります。これは前の「雀」と比較してみたら、容易に納得の出来ることであると思ひます。従來の童謡によさうした方面の研究も甚だ不足して居たやうな気がしてなりませぬ。

綴り方に於ける童謡の指導は矢張り鑑賞と創作の兩方面から之を行ふことが出来ると思ひますが、その創作は教室の中で、或る定まつた時間内にやらせるよりも、むしろ適当な題材を得て興が湧いた時に、随時に作つて来るやう仕向けた方がよいと思ひます。次にあげるのは、さうした方法によつて生れた兒童の作品であります。

ハ ト

ハトコイ、ハトコイ、ハトボツボ。

オテラ ノ ヤネ カラ オリテ コイ。

スキナ オマメ ヲ ヤリマセウ。

ハトコイ、ハトコイ、ハトボツボ。

オテラ ノ ヤネ カラ オリテ コイ。

ミンナ デ イツシヨ ニ アソビマセウ。(一年男)



あつかいトマト

いたのまで  
 つゝみをとけば  
 ころ／＼と  
 ころがるトマト  
 あつかいトマト  
 いたのまに  
 あかいかげうつる (三年女)  
 うさぎ  
 お家の中の小うさぎが  
 お耳をたふしてやすんでは  
 おくらのやねからいたづらすとめ  
 ちゆんちゆくちゆんと おどかせば

すや／＼ねてゐた 小うさぎは  
 お耳をたてゝ びよんとおきた。(三年女)  
 あさひ  
 あれ／＼あさひが  
 さしこんだ。  
 しやうじのあなから  
 さしこんだ。  
 黄色の棒になつて  
 さしこんだ。(三年男)

二 和歌及び俳句の指導

短歌の特質—短歌の指導—俳句の特質—俳句の指導

和歌—短歌も無論「詩」である以上、そこには矢張り詩としての豊醇なる



内容と、之を盛るに相應はしいリズムミカルな言葉が必要です。而して短歌の形式は昔から五七五七七の三十一音ときまつて居りまして、一と頃若山牧水氏等によつて之が破壊を企てられたこともあつたやうであります。今日ではまたいつの間にか、もとの形式に歸つてしまつたやうに見えるのであります。しかしながら此の五七五七七ときまつたやうに見える短歌の形式も、よくよく考察してみると其の内面には幾多の異なつたリズムがありまして、それを言葉の上にも見ることが出来ます。たとへば

十餘人<sup>五</sup> 縁に<sup>三</sup> ならびぬ<sup>四</sup> 春の<sup>三</sup> 月<sup>二</sup> 八坂の<sup>四</sup> 塔の<sup>三</sup> 廂<sup>三</sup> はなるゝ<sup>四</sup> (晶子)  
 葉を<sup>二</sup> しげみ<sup>三</sup> しだれて<sup>四</sup> つちに<sup>三</sup> 影の<sup>三</sup> 濃き<sup>二</sup> この<sup>二</sup> かしの樹に<sup>五</sup> 夏は<sup>三</sup>  
 來にけり<sup>四</sup> (牧水)  
 さく<sup>五</sup> く<sup>五</sup> と<sup>三</sup> 草を<sup>三</sup> 刈る<sup>二</sup> 音<sup>二</sup> しづかにも<sup>五</sup> 沼を<sup>三</sup> わたりて<sup>四</sup> きこえ<sup>三</sup>  
 來るかな<sup>四</sup> (空穂)  
 木の芽<sup>三</sup> ふく<sup>二</sup> 南おもての<sup>五</sup> 日あたり<sup>五</sup> に 今日も<sup>三</sup> 來て<sup>二</sup> なく<sup>二</sup> 名も知ら<sup>五</sup>

といつたやうな具合に、同じく五七五七七の三十一音でも、その各々についてみると、そこには言葉の使ひ方によつて随分と異なつたリズムが感ぜられるのであります。随つて歌全體の有つ感じなり調子なり——例へば、莊嚴、優美、暗い、明るい、といつたやうな——は、此の小さな相異が本になつて、千首千様のひよきを齎らすわけであります。

なほ、子供の短歌はどこまでも子供の生活の表現であるべきは言ふまでもないことで、此の點から言へば之を童謡の延長若しくはその一種と見ても差支ないと思ふのであります。

ぬ<sup>二</sup> 鳥<sup>二</sup> (信綱)  
 瀧<sup>五</sup> つぼに<sup>五</sup> 落ちて<sup>三</sup> しづみて<sup>四</sup> また<sup>二</sup> 浮きて<sup>三</sup> つばき<sup>三</sup> ながるゝ<sup>四</sup> 谷川の<sup>五</sup>  
 水<sup>二</sup> (直文)

短歌の指導は やりやうによつては尋常三四年から出来ないことはありませ



んが、私は之を尋常五年からはじめてみました。次にその實際を述べて見たいと思ひます。

先づはじめに、次の短歌を鑑賞材料として提供し、子供と共に味ひつゝ其の感じなり想像境なりを發表させてみました。

つきくゞに伐り倒さるゝ松の木を眺めてをれば春日さびしも 若山牧水

春の日の眞黒き岩にあふむけにころがりて居れば睡眠さし來る 同

雲二つあはむとしてはまた遠く分れて消えぬ春の青空 同

つゝじ咲く公園のみちを人等行き軽き埃を立てにけるかな 金子薫園

大銀杏そびゆる寺の風すゞし朝のひぐらしくれの蛸 同

夏くれば白き窓かけまづかけて街にしたしむさびしき書齋 土岐哀果

寢臺よりころげ落ちたる一大事わが兒をかしき夏の夜なるかな 同

秋の雨煙りて降ればさ庭べに七面鳥は羽も廣げす 齋藤茂吉

赤き日の落つる野末の石の間のかそけき蟲にあひけるかも 同

さわくゞとわが釣り上げし小鱸の白きあぎとに秋の風ふく 落合直文  
たかくゞと雪つもりたる高原の夜の中より月は生まれぬ 窪田空穂  
あやまちて切りし小指を冬の夜の灯のもとに見る寒さかな 前田夕暮  
石一つなぐれば遠く飮して冬の林は立つ鳥もなし 尾上柴舟  
なつかしき冬の朝かな湯をのめば湯氣やはらかに顔にかゝれり 石川啄木  
今日ひよいと山が戀しくて山に來ぬ去年腰かけし石を探すかな 同  
これ等は何れも明治から大正にかけての作家の歌であります。特にこれ等を選んだわけは、なるべく子供の理解しやすい様なものといふ標準によつたのであります。

さて右の歌を鑑賞させた後、子供めいゝが折にふれて自分の生活を省りみ、適當な題材を掴んだら之を短歌にまとめて來るやうに言ひつけて、創作を家庭の仕事にうつしました。次の作はさうして得たのであります。

□ (尋 五 男)



をかしくてぶつとふき出せば先生の細長き顔ちらりと光る  
まわつたと大きな聲で叫ばれて笑ひ顔して立ち上るかな

□

(尋 五 男)

ブリキ屋の軒にかけたる街燈のかすかに光る雨の夜かな  
朝もやの一面にこめた川岸に舟の浮び出づ雨上りかな

□

(尋 五 男)

電燈の下で裁縫する母がふと顔あげてまたゝきをする  
ふんわりと土より出でしとうなすの二葉にそゝぐ朝の雨かな

□

(尋 五 男)

電燈の光目がけてほとと夏蟲とべり山かけの家  
雨あがり暮れゆく庭の池の面に小さき魚の浮びいづるかな

□

(尋 五 男)

窓ごしにお寺が見ゆる其の寺の屋根の彼方に月はのぼりぬ

猫の足とつてをどりを教へると妹等さわぐ電燈の下

俳句は自然を題材とする短詩でありまして、従来の傳統的な約束に随へば、  
五七五の十七音からなるといふ形式上の制約の外に、季、題といふ内容上の制約  
もあつたのでありますが、最近には此の二つの制約を超越した所謂新傾向の句  
もなか／＼盛んになつてまゐりました。

尤も五七五の十七音からなるといふ形式上の制約も、昔から絶對的なもので  
はないのでありまして、例へば

屋根や時雨谷深うして耳遠し	宗	因
枯枝に烏のとまりけり秋の暮	芭	蕉
三日月や朝顔の夕べつぼむらん	其	角
花に暮れて我が家遠き野道かな	蕪	村
罷り出でたるは此の藪の藁にて候	一	茶



など、いつたやうな所謂字餘りの句もなか／＼少くないのであります。

また字餘りでない十七音丁度の句でも、之を細かに考察すると

山路	來 <sup>二</sup> て	何 <sup>四</sup> やら	ゆ <sup>三</sup> かし	菫 <sup>五</sup> ぐさ	芭	蕉
古池	や <sup>一</sup>	蛙 <sup>三</sup>	と <sup>四</sup> びこむ	水 <sup>三</sup> の	音 <sup>二</sup>	同
まづ	た <sup>三</sup> のむ	椎 <sup>五</sup> の木も	あ <sup>二</sup> り	夏 <sup>五</sup> 木立	同	同
あら	た <sup>三</sup> うと	青 <sup>三</sup> 葉	若 <sup>四</sup> 葉の	日 <sup>二</sup> の	ひ <sup>三</sup> かり	同

といふやうに、それ／＼異なつた音律を持つてゐることは、短歌の場合と全く同様であります。

ところが、新傾向の句になると、五、七、五はおろか、十七音の制約をどし／＼破つて全く自由詩の天地に躍り出たのであります。尤も、中にはわざと十七音にすねて、變にひねくれたやうな句もないではありませんが、しかし十七音にうまく纏るならそれでよし、纏らないならば外に何等かのリズムを有たせて、適宜の長さにとめるといふところに、新傾向の主張は大體一致してゐるやう

であります。次に其の二三例をあげます。

木の間の水春日さすまゝのゆらぎ	碧	梧桐
そよぎかはして若葉が喜べるほどの風	井	泉水
蓮飯こぼるゝ地の上の砂	一	碧樓
机おし出し出し蝸釣り初め	碧	童
せつかくの甘酒なりいたゞきます	鶉	平

これ等は五、七、五といふ舊來の大まかな調子こそありませんが、それ／＼何等かのリズムは有つてゐます。靜かに口ずさんでみて下さい。

次に季題の制約であります。これは元來作者の鋭敏なる觀照眼によつて自然の姿に眺め入る時、そこには具象を通して大自然の時の流れが見出されなければならぬといふ所から起つたものであらうと思はれますが、それが何時の間にか單なる課題となり了り、彼の綴り方に於ける課題主義の如くなつてしまつたのが、従來の俳句であると思ひます。即ち俳句を作るのに、自分の實感から



生み出すのでなくて、季題からヒネリ出すのが其の行き方で、そこには根本的に改革を要するものがあると思ふのであります。たとへば

鶯や裏よりきたる琴の友

鶯や籤の前なる一軒家

鶯や小さき籤の前うしろ

鶯や家をめぐりてさゝ流れ

鶯を馬上ながらに聞きにけり

といったやうな句は、その根柢にどれだけの實感が動いてゐるか頗る疑なきを得ないのであります。要するに俳句に於ける季題は、従來の如く之を歳事記の中に求むべきものではなくて、やはり自然の中に求める——否、作者自身の生活の中に見出すべきものであると思ふのであります。

さて綴り方に於ける子供の俳句は、やはり短歌と同様之を童謡の延長又は其

の一種と見るべきで、どこまでも兒童各自の實感から生み出させなければならぬと思ひます。而して是が指導の時期は、尋常三年からでも出來ないことはありませんが、一般には尋常四年頃が一番適當な時期ではないかと思ふのであります。

私は嘗て尋常三年の國語讀本卷六を取扱つた時、その第二課「日本の高山」と題する一文の中に「ふとん着てねたる姿や東山」の句がありましたのをきつかけに、次の俳句を補充材料として鑑賞させた事がありました。

水底に魚の影さす春日かな 子規

春風にこぼれて赤し齒みがき粉 同

のどかさや障子あくれば野が見ゆる 同

手をついて歌申し上げる蛙かな 宗鑑

からかさや押しわけ見たる柳かな 芭蕉

名月や壘の上に松の影 其角



化けさうな傘貸す寺の時雨かな 燕 村

ところが四五日して、手塚といふ女の児童が「先生、俳句を作ってみましたから見て下さい」と言つて、紙ぎれに次の五句をかきつけたのを持つてきました。

庭のすみ菊のかけうつる水たまり

えんがはに猫の足あと秋のあめ

秋ざめにいもやへ集る子供たち

秋の山石にこしかけむすび食ふ

えんがはにねこまるくなる秋のあめ

これがもとになつて、同級の児童のなかまに、大分俳句に興味をもつ者が出来てまゐりました。そして時々一句二句づゝ持つて来ては見せるのでした。

同じ級が四年になつてから、春の頃一度、夏に一度、十句ばかりづゝ俳句の鑑賞をやらせ、十一月も末、冬のはじめになつて、はじめに一般の子供に句作

をすゝめてみました。勿論雑詠であります。次に少しくその收穫をあげてみたいと思ひます。

□ (四年 男)

窓々にくろきえんとつならびけり (ストープ)

二三枚ちりのこるポプラの葉つ葉

□ (同)

枯枝にくものすが白くひかる朝

□ (同)

白々とさじんかの花がさきにけり

池のそこに黄なかれくさが映つてる

□ (同)

かさかさと落葉の中の藁だつた

□ (同)



わたり鳥空なきつれてわたりけり  
松に来てちつちつとなく何の鳥

□ (同)

まてばつたおれは殺しはせんのだぞ

□ (同)

さわくとさゝがすれ合ふ冬河原

□ (同)

きりの實がからくと鳴りて日が暮るゝ

□ (同)

板の間にみかんが二つころんでる

いぬの子が落葉の中でじやれてゐる

□ (同)

かれ枝の間にみえるとほい山

物ほし竿にくつつ下二足こぼつてる  
□ (同)

□ (同)

やきいもの皮すてにゆく冬の雨

□ (四年女)

木の下に立てば落葉に埋まる足  
木のかぶにどくなばがならび生えにけり

□ (同)

え、い、だのひとりしよんぼりかへりさき  
ぼかぼかと日あたりにおてあたゝかい

□ (同)

あをぎりのたねを拾ふや秋日和  
赤や黄のおちばで埋まるお庭かな



かれくさの影がうつるや池の中  
水かれて寒げにふるふしやうぶの葉  
さよんかのかけにちらく冬帽子  
おちばの中にくまでが一つほつてある  
せのびしてやつと手がとどくみかんな

□

(同)

なんてんのまつかなたまに日があたる

□

(同)

しんくと雪のふる夜のしづかなり

□

(同)

北風に身をふるはせるポプラかな  
かれくさに猫のひるねや庭の隅  
日あたりや枯木にさげる紙人形

なんてんのまつかな玉をかぞへけり

□

(同)

みせさきにはごいたかさる年の暮

□

(同)

さむさうによなきうどんのリンが鳴る

□

(同)

みちばたのすてさうりにもつもる雪  
井戸の中におちばの舟がうかんでる  
おふるばの前におちばが山つくる  
石がきにはひまはる鳶のくきかれて

□

(同)

雪ふりに馬もむしろを着て通る  
木の枝が重さうに雪をかゝへてる



## 第十二 俳句を主材とした想像文の指導

### 一 俳句と其の鑑賞

想像の根柢としての形式的要素——想像の根柢としての内面的要素

俳句——に限らず一般に詩を主材として、之が鑑賞によつて生ずる想像聯想の境地を描寫的に綴らせることは、單に讀方教授の延長としてのみならず、單獨に生活表現の綴り方の仕事としても頗る價值のある、また面白い仕事だと思ひます。彼の所謂「歌の評釋」の如きも亦此の仕事が基礎になつてそれに批評解説の加はつたものであらうと思はれます。

さて此の種の表現について先づ直接的に見て第一に其の基礎乃至根柢をなすものは 作者の「詩」其ものに對する正しき讀解であります。詩の中の言葉に

了解の出來ないものがあつたり、句の意味に不明の點があつたりしたのでは十分に其の詩を味ふことが出來ず、隨つて如實なる想像境を形成することが出來ません。從來の俳句の如きものを材料として子供に綴らせる場合には、此の意味に於て俳句の約束的慣例となつてゐる所の季題とか切れ字の用例とかに就いて、一通り其の句に必要な註釋を教師の方から加へてやることも、場合によつては必要となるであります。而して「詩」そのものに對する理解の要件として大切なものが三つあります。その一は時であります。春夏秋冬の季はもとより、朝、晝、夜等の時刻、その他晴雨寒暖等の微に到るまで、なるべく詳細に分るに越した事はありません。その二は場所であります。前にあげた時と相關聯して、描かれた場面の所在が明かにならなければ我々は詩に對して十分な享樂の境地に入れませんが、即ち室内か野外か、都會か山地か、海濱か農村か漁村か、これ等を描かれた材料——例へば農材ならば稻とか甘藷とか、漁村ならば蛸壺とか地引網——とかによつて先づ理會することが必要であります。その三



に必要なのは人（作者を含む）であります。即ち描かれた場面——前述の時と場所——を舞臺として背景として活動する客観的の人物、及び作者、これがわかることによつて詩の味はいよ／＼佳境に入り、中心を得て、我々は一つのまとまつた情調を味ひ得るのであります。つまり我々は先づ詩に對した時、時、場所、人の三者が明かになつてはじめて如實なる想像の境地に入り聯想の緒を得ることが出来るので、隨つて私の所謂「詩を主材とする想像文」ははじめてそこに生命表現の價值と意義とを生ずるのであります。

右に述べた根柢は一種の知的形式的要素であります。次に今一つ大切な根柢となるものは内面的、素ともいふべきもので、其の句によつて喚び起さるゝ作者の經驗乃至體驗であります。これは表現そのものから言つたら時間的に或は間接となるかも知れませんが、創作の根本義に立つて見ましたら、これは前に述べた「詩に對する理解よりも一層根本的なもので、むしろそれ等の大根柢

となり、且つ鑑賞乃至表現の直接對象となるものだと思ひます。こゝに於てか我々は作者の生活經驗そのものがあらゆる意味に於ける創作の根柢となるといふ眞義に到達するのであります。通常我々が詩を読んで其の内容場面を玩味し想像するといつてゐることは、之を別な言葉でいへば、其の詩を媒介として自己の體驗を喚起し、之を玩味するといふことで、つまり詩を通して自己の生活を味ふことなのであります。故に讀者の經驗乃至體驗の廣狹深淺といふことは、直ちに詩を味ふ上に或は量（？）の上から、或は質（深さ）の上から觀面の効果となつて現はれて来るのをどうともすることは出来ません。例へば四面山に團まれた山村を一步も出た事のない人には「荒海や佐渡に横たふ天の川」や「春の海ひねもすのたり／＼かな」の境地は一寸想像出来すまいし、又「起きて見つ寝て見つ蚊帳の廣さかな」の眞味は子を失うた母親にしてはじめて十分に味ひ得る所であらうと思はれます。かう考へて來ますと、子供に此の種の想像境を描寫させる——私の所謂想像文を綴らせる——につきましては、その主材



とすべき詩の内容そのものに、撰擇上餘程の注意を要することになるのであります。

## 二 指導の實際

第一例(鑑賞より創作へ)——第二例(新傾向の句)

以上は此の種の文章を綴らせる前に於て教師の一應考慮すべき事柄でありますが、次に私が嘗て此の種の指導を行つた實例を述べて御参考に供し、併せて御批正を仰ぎたいと思ひます。豫めお斷りしておきますが、學年は尋五六の複式學級であります。

私が此の指導をやりましたのは大正十年の秋十一月のことでありましたが、私は前後二回合計四時間をかけて之を試みました。第一回目には先づ次の句を板書しました。

蕙 着て牛の子通る時雨かな

そして時、場所、人をたしかめた後、しづかに其境地を思ひ浮かべさせました。暫くたつて二三人にその想像境を描寫的に話させてみました。次に私は次の二つの文章をよんで聞かせて一つ／＼其の境地を味はせました。

夕方である。しと／＼と降る時雨の中を、蕙を着た四五匹の牛の子がちよこ／＼歩いて来る。

後から五十あまりの男がぼろ／＼の着物を着て手には破れた茶色の傘をさしてゐる。

子牛が油断をするとすぐ鞭をあげて打たうとする。子牛はおどろいて又もちよこ／＼歩いてゆく。

男はごほんとかげらひをして、ぼろ／＼の着物の襟をかき合した。子牛の着てゐる蕙はびつしよりとぬれてゐる。

時雨は又も一しきり強く降り出した。

□



時雨はまだやまない。窓の柱によりかゝつて外を眺めてゐると、向ふの山  
蔭から牛の子がぞろ／＼と薙を着て現はれた。すた／＼とぬかるみの中を  
國道筋へと向つてくる。牛ひきの爺さんは鞭を持つて亂れがちになる牛の  
子の足を打つ。牛の子は時々謝るやうに「もう／＼」といぢらしい聲を立  
てる。町には早や電燈がついた。子牛の聲はだん／＼遠ざかつてゆく。

此の文章はずつと昔、私が前任地の鹿兒島縣女子師範學校附屬小學校に於て  
尋常六年女子の學級に矢張り此の種の指導を試みた際に得た子供の作品であり  
ます。さて此の章の鑑賞が終つて後、更に私は次の數句を板書しました。

長き夜を月とる猿の思案かな

明月や螢の上の松のかけ

萬燈に夜の霧こめし祭りかな

月見とてゆけば錢とる小橋哉

もろこしの葉が枯れて幹が鳴る風

最後の一句は新傾向の句であります。これ等の句について一通り例の時と場  
所及び人等をたしかめ、尙難語句の質疑に答へた後、めい／＼好きな一句を選  
ばせて、さつきの通り其の境地を想像させてみました。そして十分に想像が出  
來たらそれを書いて御覽なさいと命じました。かうして得た成績は次の時間に  
批評鑑賞及び自己訂正をさせただけであります。今その中から二三を次に御紹  
介いたします。

長き夜を月とる猿の思案かな

深山の夜はふけた。きれいな、波一つ立たない湖の面に月の姿がまろく映  
つた。と、木の枝に腰をかけて此の月を眺めた猿どもが、キヤツ／＼と小  
聲で啼き合つた。そして年とつた一匹の猿が腕組して小首をかしげ、しき  
りに何か考へはじめた。外の小猿は湖の面に映つた月の美しい姿をしげし  
げと眺め入つては唯キヤツ／＼と何やら啼きつゞけてゐる。月は今までよ  
りも一そう綺麗に澄んで湖の面にはつきりと姿をうつした。



さつきから腕組をしてひとりだんまりと考へ込んでゐた年より猿は、何か思ひついたらしく組んでゐた手をほぐして立ち上りながら何やらキヤツキヤツと二と三とを叫ぶと、子猿どもは方々から集つて来て一心に聞いてゐるらしかつた。やがて年よりざるは手近にあつた小枝につかまつてびよんと向ふに木轉りする<sup>と</sup>、湖の上に一きは長くのびた枝の先の方へいつてぶらさがつた。すると子猿どもはわれも〜と其のあとからついて行つて、見てゐる中に次から次へと猿の鎖が出来てしまつた。やがて一番端にゐた猿が手をのばして少しばかりからだをふると、猿の鎖はゆらり〜とゆれる。手が水にとゞきさうになつたと思ふと、その猿はいきなり水に映つてゐる月のかげを掴んだ。湖の面には時ならぬ小波が立つて月の影が一しきりくづれた。猿はふしぎさうに自分のぬれた掌を見入つた。もう一ぺんチヤブ〜とやつてみたが、そのたびに月はくづれて金の破片をちらしたやうに波が四方へひろがるばかり。

猿はやがてもとの枝にかへつて、相かはらず小首をかしげながら湖の面を見入つてゐる。月は前よりも更に一層あざやかな姿を湖の面に映してゐる。  
(第六女)

同 前

がけの下の谷間にはどす黒い夜の流れが音もなくよどんでゐる。がけの上には大きな一本の松が、大蛇か何ぞのやうにまがりくねつて、そのさきを谷川の水の上までのばしてゐる。枝のさきにはさつきから一つのまつくるなかたまりがくつついてゐて少しも動かない。

しばらく立つと、谷の向ふの岸にパツと一すぢの光がさしてあたりがやゝ明るくなつた。月が雲から出たのである。枝の上の黒いかたまりは、ひよいと後ろを向いた。それは猿であつた。

やがて月はだん〜中空に上つてゆく。今までどす黒くよどんでゐた水の面には、いつのまにか美しい月の姿が浮んでゐた。此の時、今まで枝に腰



をおろしてゐた猿はつと立ち上つて、小枝につかまりながら水の上にすれ  
 ぐに差し出た枝の一番端まで傳つて行つた。そしていきなり手をのばし  
 て下に映つた月をつかんだが、急に手をふつて小首をかたむけた。月の影  
 はしばらくばらばらになつてみだれた。やがてまたもとのやうにまるくな  
 つた頃、もう一度つかんでみたが、今度もまただめだつた。猿は氣をくさ  
 らしたらしく、やけになつて四五へんつゞけさまに水の面をかきまぜて、  
 やがてする／＼と枝の中程のところまで歸つて來て腰をおろした。一しき  
 りばら／＼に亂れた月の影は、波がをさまると共に、またもとの丸い姿に  
 かへつて、玉のやうに美しく水面に浮んだ。猿はうでぐみをして、首を右  
 左にかたむけながらしきりに考へ込んでゐる。(尋五女)

もろこしの葉が枯れて幹が鳴る風

山畑のもろこしにさしてゐた秋の夕日のかげがいつしかうすれて、もろこ  
 しの幹が金色から黒ずんだ色にだん／＼かはつて行く。もろこしの實は大

方もがれてしまつたと見えて、ところ／＼にぶらりとたよりなく垂れ下つ  
 た葉が、うす白くうらがれてゐる。風が一しきり吹き渡つて來て、もろこ  
 しの幹がふるふるやうにガラ／＼と音をたてた。(尋五女)

第二回目には次の數句を板書して前と同じやうな方法で書かせました。但し、  
 こゝでは文例は一つも讀まず、すぐに綴らせました。

鴉冷たく啼く朝を焚火して人は  
 人あり曉のさゝなみ汲みて去る  
 冬の夜明のせとものゝ響かな  
 下駄が一杯ぬぎそろへてある玄關の南天  
 新らしき朝の森に向ひて呼吸する

今度は新傾向の句ばかり出して見たのでした。例によつて子供の成績を二三  
 左に御紹介いたします。



鴉冷たく啼く朝を焚火して人は

橋かけの工事があると見えて、ほりかへされた土の上に新らしい材木の切り込みをしかけたのが幾本となくならんでゐる。あたりには霜が一面に下りてゐて、すべての草や木ぎれが白くふくれてゐる。

土堤の下には大工さんらしい男の人が三人、煙管を咬へながら木の屑の焚火に六本の手をかざしてゐる。

をり／＼火が消えさうになると、その中の人が木屑をついたり、もえさしを中の方に入れたりして、火をたく。煙が少し風にあふられて、顔をしかめた男の耳のあたりをかすめながら、すうと横にくづれなびいて、やがてどことなくほぐれて行つてしまふ。

「カア／＼／＼／＼」だしぬけに聲がして、二三羽の鴉が川を越えて向ふの森の方へ飛んで行つた。(尋五男)

同前

つめたい霜の朝。カア／＼と氷りつくやうな聲で屋根の上を二三羽の鴉が啼いて通つた。向ふの畑には材木がたくさん積まれて、これから新しく家が立つらしい。材木の向ふには二三人の印ばんでんを着た男の人が、焚火をしてあたつてゐる。あとから後れて来た男が一人、鳥打帽を一寸ぬぐやうにして「お早う」と會釋すると、「おゝ寒ム」といひながら焚火によつて手をかざした。鳥がまた一匹、カアと一聲ないて通つた。(尋五女)

同前

「やあれやれ」とまつかになつた手を焚火のへりによせた。そのへんには、しもがちやいろになつた落葉の上にまつ白くふりかゝつてゐる。男たちはこんの、しるしばんてんをきてゐる。はら／＼と柿の葉が二三枚おちた。うす青い空をからすがかあ／＼と二こゑ三こゑないて向ふの方にとんで行つた。(尋五女)

下駄が一はいぬぎそろへてある玄関の南天



小じんまりとした玄關には、何かのお祝ひごとでもあるのか、たくさんの下駄がぬぎそろへてある。大人の下駄、子供の下駄、男の下駄、女の下駄、赤い緒に白い緒黒い緒、さまざまである。玄關の前よこの南天は、五六本の幹がみんな程よくちがつた高さにのびて、青い葉の間から赤い玉がすゞなりにこぼれてゐる。朝の日光が葉を照らし玉を照らして、その影が紫色に玄關の中にさし込んでゐる。家の奥の方からは、をり／＼人の話してゑに交つて、にきやかな笑ひ聲がもれて来る。(尋六女)

新らしき朝の森に向ひて呼吸する

晦日の夜はほの／＼とあけて、新しい朝が来た。方々でがら／＼と雨戸を繰る音がする。「今日は元日だ。」と思うと、僕は勢よく飛び起きて庭へ出た。つめたい朝風がさつと吹いて来た。向ふの森のあたりには霞か煙のやうなものが一ぱいかゝつて、ボンやりと見える。その遙か向ふの空には紫色の雲がすうつとたなびいてゐて、やがて日が出るらしい。僕は森の方に

綴り方指導原論 終

向つて両手をあげながら深呼吸をした。(尋五男)



昭和二年五月二十日發行

著作權所有

綴方指導原論

定價金參圓六拾錢

著者	田上新吉
發行者	東京市京橋區南傳馬町二丁目五番地 目黑甚七
印刷者	東京市京橋區木挽町二丁目十三番地 石上文七郎
印刷所	東京市京橋區木挽町二丁目十三番地 青文舎印刷所

發行所

東京市京橋區南傳馬町二丁目  
新島縣長岡市表町四丁目(本店)  
新潟市古町通七番町(支店)

目黒書店

(東京) 電話京橋三四一七番 振替東京二八〇九番  
 (岡) 電話長岡一八番 振替東京三六一九番  
 (新潟) 電話新潟九〇三番 振替長野四〇九〇番



終

